

社会・労働運動を学んで40年

1986年12月16日，立命館大学定年退職記念講義

塩田庄兵衛

只今は小野一郎学部長からたいへん懇切な御挨拶をいただきまして、恐縮致しました。本日は、私の告別講義だというので大学の内外から多数の方がお集まり下さいましてありがたく存じます。御紹介いただきましたとおり、立命館大学経済学部でちょうど13年お世話になったわけですが、恒例にならって、退職記念講義をやらせていただくことになりました。

いろいろなタイプのやり方がありそうですが、本日は、私自身がこれまでどんなつもりで、どんな学問をやってきたかを、自分なりに総括してみたいと考えました。ところが、思い出しながらメモを作ってみますと、どうしても5・6時間かかりそうな気がします。それを1時間程度に圧縮要約することになりますので、きわめて舌足らずの不行届きなお話になるかと思えます。それから、現在の時点からふりかえって整理するわけにありますから、かなり格好をつけたきれいごとになるでしょう。その点は皆さんの方で、適当に割引きしながら聞いて下さるようにあらかじめお願いしておきます。

1 なぜ、経済学か——戦争と貧乏への関心

まず、なぜ経済学を勉強するようになったか、という問題であります。

旧制高校の文科から大学に進学するときに、どの学部をえらぶか、かなり迷いました。結局、戦争と貧乏の問題へのこだわりから、経済学部をえらぶことになりました。といいますのは、私の小学校時代に満州事変（1931=昭和6）が

はじまり、中学生のときに当時支那事変と呼んでいた日中戦争（1937）がはじまりました。太平洋戦争がはじまったのが大学に入学した年の暮です。つい1週間ほど前、12月7日に早稲田と明治のラグビーの試合があって、6万2千人とか見物人が集まって、1点差の接戦で明治が勝ったということであります。ところが、ちょうど45年前の1941年12月7日が同じく日曜日でありまして、私は神宮外苑の競技場に早稲田と明治のラグビー戦を同じ下宿の友人と見に行きました。下馬評では明治が優勢ということでしたが、試合の結果は番狂わせで早稲田が勝ちました。今日は面白かったなア、あした月曜日には午後の外国書講読（ドイツ語の経済学書）の授業が終わったあとで、かねて評判のアメリカ映画を見に行こう、と話し合いながら下宿に帰って寝ました。

その翌日、12月8日早朝、ハワイ真珠湾攻撃の寄襲作戦成功で大東亜戦争がはじまった、という大本営発表のけたたましいラジオ放送でたたき起こされました。近いうちにアメリカ、イギリスとの大戦争になりそうだという予感はありませんでしたが、それがその日に始まるということは、私たちにはわかりませんでした。こうして、中国侵略からはじまって太平洋戦争にまで拡大した戦争は、1945年8月15日の敗戦まで、足かけ15年間連続しました。私の幼年時代・少年時代から青年時代にかけては、完全に戦争に塗りつぶされ、しかもそれがどんどん大きくなる時代でした。なぜ日本という国は、こんなに戦争ばかりやるのだろう、それが私にとっての疑問でした。

もう一つは貧乏という問題です。私自身は、こんにち風にいえば文字どおりの“中流”，まあ中の中か中の下くらいの生活程度の家庭に育ちました。いまとちがって進学率が低かった当時、大学までやってくれたのですから、食うや食わずというわけではない、その点では恵まれた環境でした。しかし小学校いらい身のまわりを見ておきますと、世の中には貧乏という問題があって、そのために人びとが自分の才能を伸ばす機会を妨げられたり、人間関係が対等平等でなく、卑屈な態度をとることをよぎなくされている、というようなことが目について気にかかりました。きわめて素朴な段階ながら社会の矛盾に気づきはじめ、それがだんだんふくれあがるのを意識するようになりました。そして、これら

戦争や貧乏の問題を解明することができる学問が経済学だという話を、何かの機会に読むか聞かして、そんな学問があるならやってみたいという気になったようです。これが、なぜ経済学か、という理由です。

私は大学へは2年半通いました。当時は旧制ですから、就学期間は3年であったはずですが、太平洋戦争がはじまると、勉強の方はいいかげんにして早く軍隊にこいということで、半年くりあげて2年半で卒業証書を押しつけられて、大学を出されました。いわば“月足らず学士”です。

いわゆる“暗い谷間”の学生生活でしたが、その中で唯一の光明は、大河内一男先生（当時東大経済学部助教授）のゼミナール（演習）に入れていただいて、指導を受けたことでした。生涯の友となるようなすぐれた学生たちが集まっておりました。そのゼミで私は、マックス・ウェーバーというドイツのえらい社会学者を研究対象にえらんで、彼の著作やドイツ語の参考文献をいくらか読んで、「マックス・ウェーバーにおける政治と科学」という大きなタイトルのおそろしく稚拙な卒業論文をまとめました。しかしこわいもので、いま振りかえてみると、今日まで私についてまわっているテーマです。つまりマックス・ウェーバーは、社会科学が“客観性”を持ち得るためには価値判断を排除しなければならない、という方法論を唱えたことで有名ですが、私は科学研究と現実の社会との関係、科学者の世界観と政治とのかかわりはどうであるのかという問題に関心をもって、幼いながらこのテーマと取り組んでみたわけであり、そして、今日までずっとこの問題を考えつづけてきました。

ゼミは非常に面白かったです。学問というものはこんなに面白いものか、と目を見はる思いでした。演習室に出入りするたびに、身体のなかがどんどん充実して、はちぎれそうにふくらんでくるように感じました。それで2年半の大学生活はあまりにも短かいので、もっと本を読みたい、できれば読書生活を長くつづけたい、という気になりました。ところがたまたま私が卒業するとき、大学院特別研究生という制度がつくられて、2年間徴兵を猶予してくれるということになりましたので、私はそれに応募して首尾よく採用されました。

実は、2年間の徴兵猶予というのが私にとって大きな魅力でした。当時すで

に当然のこととして徴兵検査を受けて合格し、卒業と同時に軍隊に入るように通知を受けておりました。ところが陸軍にくらべると海軍の方が、人間の扱い方がいくらかまじいという噂でありましたので、私は海軍経理学校の試験を受けて合格し、そちらの方へ行くつもりでした。このコースをとっておれば、中曽根康弘というひとの後輩になるところでしたが、いま申した大学院特別研究生という新制度に拾われたので、軍隊の方には諒解してもらって、東大経済部の研究室に残りました。2年のうちには戦争は終わるだろう、という予感もありました。

学部教授会から私を与えられた研究テーマは「工業政策」でした。ゼミナールで指導を受けた大河内助教授の社会政策とか社会思想史とかいうような“危険な”学問はダメだ、お国の役に立つ「工業政策」をやれ、というのが条件でした。私はこれを受け入れて、鉄鋼業、機械工業、石炭産業などの初歩を学びました。北九州の八幡製鉄所、兵庫県の広畑製鉄所などの当時最新鋭設備の巨大工場に滞在して見学したり、筑豊の炭田地帯——げんざいでは炭鉱は全滅したそうですが——を歩いたり、また中小の機械工場を見学したりしました。この勉強は敗戦とともに中断し、蒸発した形になっておりますが、今日まで私のなかに生きていような気がします。いまでも私は、いわゆる風光明媚な名所や旧蹟もさることながら、工場や鉱山の労働者が働いている現場やその生活により強い関心をもっています。

2 なぜ社会・労働運動か——平和と民主主義への開眼

1945年8月15日、ポツダム宣言を受諾しての無条件降伏という形で敗戦を迎えました。私はポツダム宣言の次の1句に強い印象を受けました。

「日本国民のあいだにおける 民主主義的傾向の復活・強化にたいする 一切の障害を除去すべし」

そうすると、わが日本には戦前に“民主主義的傾向”なるものがあって、そ

れが戦争とファシズムによって抑えこまれていたのである。それを復活させるばかりでなく、強化することが戦後の課題で、それを妨害するものは許さない、ということになります。これから私はマルクス主義の研究に本格的に取り組ましました。戦争中はマルクス主義研究は国家によって禁じられておりましたので、私は学生時代には公然とはできませんでした。敗戦後になって、ちょうど乾いた砂地が水を吸いこむようにどんどん吸収しはじめました。いま思い返して、あの頃は本当に真剣に勉強したという気がします。

そのなかで、私の気質に合っているように思われる歴史を学びたいという気持が強くなりました。そこで文学部の西洋史学科に入りなおして、歴史学の基礎訓練を受けたいと考えて、大河内一男先生と大塚久雄先生——いうまでもなく「大塚史学」で知られる西洋経済史の碩学です——に御相談しました。しかし両先生とも、それほどの必要はなかろう、研究室に居て給料をもらいながら、その気で勉強すれば足りるだろう、という御意見でした。そこで私は、そんなものかなアと思ってこの計画はとりやめにしました。

もう一つ、郷里の土佐に帰って自由民権運動の勉強をしてみたい、という気持をおこしたこともあります。ところが、空襲で自由民権運動の目ぼしい資料は焼けたから、研究はムリだよと忠告してくれたひとがあったので、早合点してそれを真に受けてこのコースもあきらめました。

ところが天皇が「人間宣言」をした1946年1月、ちょうど私は正月休みで両親のもとに帰省しておりましたが、1910（明治43）年の「大逆事件」で死刑になった幸徳秋水の35年祭が、はじめて公然と催されることになった、という地元新聞の記事を読んで、何となく気をそそられたので、飛入りで参加しました。幸徳秋水の郷里幡多郡中村町（げんざい中村市）は、高知県の西のはずれに近い辺鄙なところで、当時国鉄の終着駅から数時間、バス代りのトラックの荷台で揺られてようやく辿りついた小さな町でしたが、この記念行事に参加して私は強烈なショックを受けました。数十年も前の日本に、こんなに鋭く勇敢な思想家が居たのだ、そして自由と民主主義の思想は、地下水のように流れつづけてこんにちにつづいているのだ、ということにはじめて眼を開かれたのです。

これが動機で私の最初の仕事は幸徳秋水研究をテーマとすることになりました。

3 社会主義思想史研究

それから間もなく、世界評論社という出版社が『幸徳秋水選集』を出すことになり、編集を手伝うアルバイトをやらぬかと誘われ、私はよろこんで応じました。編集委員会代表として私を直接指導して下さったのは平野義太郎先生でした。平野先生が、戦前くらい日本の近代史研究のパイオニアとして大きな足跡を残されたことはいうまでもありません。私はこの碩学からずいぶん教えを受けました。私は学問上の恩師というべき方にたくさん恵まれましたが、そのなかで大河内一男、平野義太郎の両先生、さらにつけ加えれば、晩年立命館大学経済学部の講師もおやりになった『日本資本主義分析』の著者山田盛太郎先生に特に多くの学思を蒙っております。

このようないきさつで、私が最初に書いた学術論文めいたものは、「幸徳秋水の思想的転化」（1948、東大社会科学研究所の機関誌『社会科学研究』）です。この論文はこんにちでは学問的価値はありませんが、このころになってようやく、私が学術論文らしきものを書くことができるようになった、という意味で私個人にとっては記念品です。そのつぎに書いた「幸徳秋水の社会主義思想」（1949執筆、1953、歴史学研究会編『近代日本の形成』所収、岩波書店）は、かなり長文のものですが、その後しばらく各大学の学生の卒業論文の参考文献などとして利用された記憶が残っております。

その翌年、はじめての単行本として『幸徳秋水の日記と書簡』を編集して、注や解説をつけて出版しました。これはもともとは、『幸徳秋水選集』の最終巻に予定されていたものですが、世界評論社が倒産したので、集まっていた多量の未発表の日記や書簡を中心とする資料を、関係者の諒解を得て私個人の責任で出版したものです。政治学者の丸山真男教授が紹介して下さい、未来社

が千部程度を出してくれたのですが、結果的にこれはたいへん幸せな本でした。『週刊朝日』をはじめ多くの新聞・雑誌に著名な学者や作家が好意的に紹介して下さい、関心と呼び、研究者のあいだでよく利用されました。

その後幸徳秋水についてたびたび書いたり、『全集』（1968—73、明治文献社）の編集にたずさわったりしましたが、「中江兆民と幸徳秋水の世界」（1982、『高知の研究』第5巻、清文堂）と題するやや長文のものが最後になっています。幸徳秋水についてはまだ問題が残っているように感じていますが、新しい研究者がつぎつぎにあらわれて良い仕事をされてきたことなどもあって、私自身はストップした形になっております。

秋水——明治期社会主義思想研究と関連して、片山潜について多少勉強しましたし、さらに日本の“公害第1号”ともいうべき足尾銅山鉍毒問題と田中正造に関心をもって多少勉強しました。後者については、戦後間もなく当時新進の劇作家・木下順二さんが、田中正造を主人公にした戯曲を書かれる計画があって、私とその資料助手を依頼され、これを手がかりに私自身も、この問題をライフワークにしたいという希望があって、足尾銅山に何度も出かけたり、鉍毒被害地渡良瀬川沿岸を歩いたりしました。しかし木下さんはこんにちまでこの作品を書いておりませんし、私も文献目録をつくって一時関係者に重宝がられたり、小さな田中正造紹介をいくつか書いたりしたにとどまっております。その間に足尾鉍毒問題にたいする世間の関心は高まり、田中正造の全集が出たり、研究者が輩出したりして、私の出番ではなくなったような気がしてきましたが、関心は依然持ちつづけています。そして木下順二さんとは、田中正造はわきにおいて、敬愛する先輩としてたえず精神的刺激を受けながら、交際をつづけていただいております。

幸徳秋水、片山潜、田中正造、さらに京都出身の生物学者で右翼のテロに倒れた代議士山本宣治などについて書いたものを集めた小さな本『未来に生きた人びと』（1980、新日本新書）をまとめましたが、私が日本の社会主義思想史を中心にやってきた仕事の意図と内容のあらましは、この小さな本にもりこまれております。

4 労働組合・労働争議調査，労働運動論・労働運動史研究

社会主義思想史研究と平行してやった仕事は，労働組合の実態調査や労働運動の歴史的整理です。なにしろ労働組合運動は，敗戦によって日本国民が出会った新しい問題であります。むろん，1897（明治30）年の労働組合期成会にはじまる戦前の歴史はありますが，太平洋戦争中は潰滅しておりましたし，労働組合運動が大規模な大衆運動として展開され，戦後民主主義の主力部隊としての役割を演ずるようになったのは，第2次大戦後の目ざましいできごとであります。

このことに着目しまして，当時助手をつとめておりました東大社会科学研究所で大河内一男先生をリーダーに組織された労働組合の実態調査のプロジェクトチームに参加しました。ここで社会調査の基礎訓練を受けたと同時に，労働組合そのものと接触する機会をもつようになりました。調査報告書は『戦後労働組合の実態』（1950，日本評論社），『日本労働組合論』（1954，有斐閣）などとして刊行されておりますが，こんにち社会的常識になっていると思われる「企業別労働組合」の問題も，この調査活動のなかから大河内先生が定式化されたと考えていいでしょう。なにしろ大河内先生の社会政策論における「大河内理論」は，社会政策・労働問題を学ぶ者が戦前いらい避けて通れない関門でありますし，そのすぐれた独自の理論構成員力で戦後には「出稼ぎ型労働力論」や「企業別労働組合論」をつぎつぎに展開されて大きな影響力を発揮されました。私たちの調査は，先生の理論化のお仕事に資料的基礎を提供する意味も持ったことになるでしょうが，同時に私たちにとっては「大河内理論」にどう対処するかということが，切実な学問的課題になりました。これは私自身にとってばかりでなく学界全体にとって，大きな問題でありつづけてきたわけですが，ここでは立入る余裕がありません。

とりわけ私は，労働組合の大会の傍聴や労働争議の現場に興味を持ってよく

出かけました。当時の電産（電力産業の労働組合）や国鉄労組の大会などは、へたな芝居を見るよりはるかに見ごたえがあり、若い私は手に汗溼るといった緊張感をおぼえたものです。1948年に社会の注目をあつめた東宝映画^{きぬた}砧撮影所の首切り反対争議の大チャンバラ場面の見物にも出かけて、山本薩夫監督をはじめ映画人たちとも知り合いました。さいきん私は「母さんの樹」という映画に俳優として出演しておりますが、これは別に争議調査と直接の関係はなくて、私の演技力が買われたのだと思っていますが、労働運動への関心が背景にあることはたしかです。ともかく私は「現地主義」の研究方法与名づけて、よく集会やデモなど運動の現場に出かけました。そのような経験の成果はいろいろ発表しておりますが、もっともまとまった形をとっているのは、亡くなられた労働法専門家の藤田若雄教授と共編で出版した『戦後日本の労働争議』（1963、御茶の水書房）と題する厚い調査報告書です。

労働組合についての私の理解をまとめた啓蒙書に『労働組合入門』（1961、光文社カッパブックス）があります。これは実は1960年——あとで述べる安保闘争の年ですが——にスウェーデンのストックホルムでひらかれた国際歴史学者会議に、第1—第2次世界大戦の戦間期の労働運動について報告するために参加する機会があって、その旅費を工面するために印税前借りの借金奴隷になった産物です。借りた分だけ返せばいいというつもりで書いたところ、ベストセラーになって、かなりの印税がころがりこみましたので、私ははじめて独立の書齋と書庫を建て、研究者としての生産手段を整えることができました。「昔陸軍、今総評」ということばが通用していて、労働組合運動にたいする関心の高かった社会情勢にマッチしたのでしょうか、「労働」と名のつく本は売れないというジンクスのあるこんにち、当時をふりかえると今昔の感があります。

1969年から1年間、ヨーロッパに留学に出かけます節目に、それまでに書いた論文や評論をまとめたものが『現代労働組合運動論』（1969、労働旬報社）です。この論文集に先立って『日本労働運動の歴史』（1964、労働旬報社）という通史を出しております。これは方々の労働組合の講座や労働学校でこころみて

きた運動史の概説の経験をもとに、当時つとめていた東京都立大学のゼミナールで、学生をきき手に連続講義した速記に手を加えて仕上げたものです。ある週刊誌に、さいきんの学生運動家の必読文献になっているなどと紹介されましたが、その真偽のほどはともかくとして、労働組合の幹部や活動家のあいだでひろく読まれたことはたしかです。これをまとめるとき、日本の労働運動史をどのように時期区分するかについて、いろいろ考えた記憶があります。

大学では社会政策・労働問題の講義を担当しておりましたので——立命館でもこんにちまでそれをつづけてきましたが——その便宜のために親しい研究仲間の協力を得て『労働問題講義』（1971、青林書院新社）と題するテキストをまとめました。立命館に来てからもこの本の改訂版をつくって（1981）利用してきました。また参考書として『労働用語辞典』（1972、東洋経済新報社）をつくりましたが、これは立命館に来てから大学院生諸君などの協力を得て全面的にやりなおした第2版（1980）をつくりました。

しかし私は大教室でマイク片手にひとり言をいう講義よりは、学生とテーブルを囲んで対話・議論するゼミナール（演習）が好きで、これを大事にしてきました。都立大学時代には演習の学生といっしょによく見学や組合調査に出かけ、まとめて大学の紀要などに発表した論文もいくつかあります。学園祭では例年、日ごろのゼミの成果を一般市民に公開する展示や報告・討論集会などを学生が主体になって企画して、当時は成功をおさめることができました。いまでは学園祭は、私が知るかぎりどこでも、にぎやかな音楽とタレントの漫談、おでんとやきとりの屋台の行事に様変わりしているようで、私はなじみませんので、原則として講演を断る方針をとっております。

一方、私は有志と相はかって1957年に労働運動史研究会というひらかれた研究団体を組織しました。その動機は、明治維新や自由民権運動などについては、すぐれた研究者がたくさんいて、立派な成果が蓄積されている。しかし、労働運動の歴史的研究は、戦前の日本ではタブーとされていたことに禍されてきわめて遅れている。何とかこの分野の研究に市民権を獲得させたい、ということでありました。結成当初は大河内一男先生に会長を引受けていただいて、私が

事務局長を買って出て、機関誌『労働運動史研究』の発行に苦勞しながら活動をつづけました。先輩の在野の研究者糸屋寿雄・松尾洋・故人となられた中林賢二郎教授をはじめ、多くの若手研究者が結集して、わが国の労働運動史研究は国内・国外についてかなり前進したように私は思います。現在は私が会長ですが、1987年の30周年を記念して、然るべき行事を企画する必要があると思案しております。

私が編者に加わってまとめた『日本社会運動史年表』（1956、大月書店国民文庫）や『日本社会主義文献解説』（1958、大月書店）などの集団作業も私にとっていい勉強でしたが、『日本社会運動人名辞典』（1979、青木書店）は特に印象の深いものです。この本は、もともとはフランスの出版社から、各国別の労働運動人名辞典のシリーズの日本篇を編集する依頼を私が受けたことが出発点になって、研究仲間で編集委員会をつくって長い時間をかけて仕上げたのですが、フランス語版上・下2巻がパリで発行され、それをさらに充実させた日本語版を青木書店から出してもらったものです。フランスでの売行きはげんざい不明ですが、定価1万3千円の日本語版がすでに3刷まで版を重ねていることに私は感銘を受けています。

5 社会運動論・社会運動史——松川事件・安保闘争

戦後40年の経験のなかで、私にとってもっとも印象深いできごとは松川裁判闘争と60年安保闘争です。

1949年8月に国鉄東北線でおこされた列車転覆事件——松川事件では、国鉄と東芝の労働者計20名が裁判にかけられ、1審では死刑5名、無期5名をふくむ全員の有罪の判決でした。これにたいして「無実の被告を殺すな」「公正な裁判によって真実と正義を守れ」という国民的大運動がおこされ、15年近くにわたって5回の裁判がひらかれた結果、全員の無実がみとめられ、無罪判決をかちとりました。作家広津和郎氏が十余年にわたって裁判批判の壮烈なペンの

たたかいてつづけて先頭に立たれました。この松川運動の末端に私も参加し、きわめて多くのことを学びました。名もなく、金もない庶民の中に、何となくさんのすぐれた人間がいることかを知り、日本の民主主義の底力を信頼するようになりました。

戦後民主主義運動の金字塔をうち立てたこの松川運動の総括作業に私も参加しました。『松川15年』（1964, 労働旬報社）と題するコンパクトな本と、『松川運動全史』（1965, 労働旬報社）と題する大冊がそれです。また、1964年8月にひらかれた北京科学シンポジウムに、私は日本代表団の一員として参加し、「松川裁判闘争の15年」について報告しました。この私の報告にたいする反応の強烈さ——当時の南・北ベトナム、インドネシア、中国、北朝鮮、アフリカなどの代表の反応——に私は感銘を受けました。

松川事件がおこされた1949年夏には、下山事件、三鷹事件などの“黒い霧事件”＝権力犯罪の疑いの濃い謀略事件があいついでおこされたことはご存じのとおりです。国鉄総裁下山定則氏がバラバラの轢死体になって鉄路上で発見された下山事件は、自殺か他殺かのはげしい論議を呼びましたが、真相が究明されないまま1964年夏に法律上の時効が成立しました。それを残念に思う有志が10人ほどで下山事件研究会を結成しました。作家の松本清張さんや事件当時の東大総長であった政治学者の南原繁先生、労働法の沼田稲次郎教授（のち都立大総長）などが中心で、最年少の私は幹事役を仰せつかりました。多くのジャーナリストや科学者の協力を受けましたが、私たちは捜査権も裁判権も持ちませんので、徹底して真相を解明することはできませんでした。そこで『資料下山事件』（1969, みすず書房）を発表したまま休業状態をつづけております。しかし、下山事件の謎にいどみつづけているひとが後を絶たず、いまでもときどき新聞社などから、アメリカの国会図書館でこんな資料を発見したが評価をきかせてくれ、といったような連絡を受けます。

こういがかかわりを持った1949年夏にたいして、私は当時から現在まで関心を持ちつづけています。ご存じのフランスのノーベル賞作家マルタン・デュ・ガールの大河小説『チボー家の人びと』では、第1次世界大戦勃発の「1914年

夏」に焦点をあてて歴史の転換点をダイナミックにえがいています。それをもじっていえば、戦後第1の反動攻勢が反動期として定着した戦後史の大きな曲り角は「1949年夏」であり、いつの日にかこの時代の全体像を描いてみたいと私は念願してきました。その一環として、『立命館経済学』の1980年第4号に、30周年記念の思いをこめて「レッドページ」と題する論文を書きました。そしてこの論文を資料的にふくらませて、それを中心に松川運動論など関連する文章をいくつかあつめて、『レッドページ』（1984、新日本新書）という小さな本をまとめました。いまでもこの本にちなんで、レッドページ犠牲者の集いときどき講演に招かれますから、未だに生きている歴史的な事件だと感じております。

もう一つ、私が生涯忘れることのできない体験は60年安保闘争です。この大闘争に参加して私は、すこぶる充実した毎日を味わいましたが、この経験をとおりあえず総括した「60年安保闘争の歴史的意義」と題する報告をたずさえて、同年8月に（さきに申したストックホルムの国際歴史学者会議に出席する道すがら）モスクワで催された国際東洋学者会議に参加しました。これがはじめての国際学術会議への参加でした。

その後、いつの日にか安保闘争の全体像を描いてみたいと念願しておりましたが、それをやっと実現したのが『実録 60年安保闘争』（1986年6月、新日本出版社）です。私はこの本を、“ここでは議論はしない、事実についてののみ語る”と宣言して、ドキュメンタリー・タッチで物語りました。ある労働組合の泊りこみ学習会でこの本について講演を依頼されたのにつづいて、先日、労働運動史研究会の総会でこの本をめぐる討論集会を東京で催してくれました。私としてはいちおう気がすみました。

このように、いままで多少いろいろやってきた仕事を自分なりに集約してみたのが『日本社会運動史』（1982、岩波全書）です。岩波全書の性格から、大学のスタンダードのテキストというイメージで、明治維新から1980年代初頭までの日本の社会運動の通史をコンパクトにまとめたものです。亡くなられた歴史家石母田正教授に、自分はこういう分野の研究をしたいと希望を述べ、激励を受けたのが戦後間もなくのことですから、ずいぶん時間がかかったことになり

ます。この本の刊行にちなんで、労働運動史研究会の仲間を中心に、学術的な合評会付き出版記念会を催してくれました。この本をようやく脱稿したのは1981年でしたから、私のひそかな気持としては還暦記念の仕事のつもりでした。

もともと私の書くものは、浅薄ないしは“軽薄短小”ということかと思いますが、読みやすく、わかりやすいという特徴——長所とは無関係ですが——があるかと自分では思っていますが、特に気楽に啓蒙的に書いたものに、新聞連載をまとめた『歴史の道しるべ』（1973、新日本出版社）と題するエッセイ集や「朝日ジャーナル」誌に分担執筆で連載したものを単行本にまとめた『昭和史の瞬間』（上・下、1966、朝日新聞社）などがあります。後者は、もともとは写真を主体にして、それに文章をつけるという趣向のもので、私はこのようなやり方に興味があるので、いまあるベテラン編集者と組んで、『母と子でみる記録写真館、反戦平和に生きた人びと』という本をつくりにかかっています。

ところでかなり以前のことで、書店で目についた本を立読みしていたら、私の顔写真入りで、これまでの経歴や仕事を紹介してあって、「統一戦線運動に狂奔する大学教授」という見出しがつけられていました。“狂奔”というのはむろん悪意の評価がこめられているわけですが、私が統一戦線運動に強い関心をもっていることを認識してくれていることはわかりました。たしかに戦争とファシズムの苦い経験にてらして、戦後40年一貫して私は統一戦線運動に関心をもち、その成立を強く希望しています。そこで立命館とのお別れの論文のつもりで、『立命館経済学』の最近号（1986年第1号）に、「戦後日本の統一戦線運動」と題して、私なりの総括を試みた論文を寄稿しました。そしてこの論文を軸に、立命館につとめている間に書いたものなかから数篇をえらんで、『戦後日本の社会運動——労働組合運動を中心に——』（1986年9月、労働旬報社）と題する論文集をまとめました。私としては定年退職記念論文集のつもりです。

6 河上肇音読会

本日はこの教室に、河上肇音読会の会員の方々が学外からおいでになっていますが、私としても思い出の深いこのユニークな会について一言致します。

河上肇という、京都をおもな研究・著作活動の舞台にしてきた、日本のマルクス主義経済学の草分けの大思想家をどのように記念するかという問題を、1979年秋に生誕100周年の記念行事が盛大に催されたときに考えました。直接生き身の河上先生の思い出を語ることでできる人は遠からず生存しなくなります。そこで河上肇を過去の人としてではなく、未来にむかって記念する方法が必要だ、このように社会の進歩のために献身した人の志は、未来形で継承する必要があると考えて、有志のひとびとと相はかって催した集まりが河上肇音読会です。今年ですでに7年目に入っていますが、会の活動の産物として、これまで私が編者になって『河上肇「貧乏物語」の世界』（1983、法律文化社）と『河上肇「自叙伝」の世界』（1984、法律文化社）を刊行することができました。立命館大学の同僚の先生方にも多数御協力をいただいたことを感謝しております。京都ならではの催しという気がします。

申し添えますが、本年（1986年）1月30日は河上先生の没後40周年にあたりましたので、義弟にあたる末川博元立命館総長との縁故にもちなんで、末川記念会館を会場に、河上肇記念会が主催した講演会を中心とする記念集會をお手伝いして、盛会であったことも印象に残ることでした。

むすび——老而学則死不朽

私が学問に志す動機となった戦争と貧乏の問題は未解決であるどころか、ますます切実な現代的課題となっております。私は平和と民主主義、国民生活の

安定と向上のために少しでも役に立つ仕事をつづけて、できれば現役で死にたいと望んでおります。

いま私の書齋にかかっているいくつかの画や書のなかに次のものがあります。一つは江戸時代の大儒者として知られる佐藤一斎の「言志録」のなかの有名なことばを、元同志社総長住谷悦治先生に書いていただいた色紙です（先生はいま90歳を越した御高齢で病床に伏しておられます）。

少而学則壯有為	少にして学べば則ち壯にして為すことあり
壯而学則老不衰	壯にして学べば則ち老いて衰えず
老而学則死不朽	老いて学べば則ち死して朽ちず

これは私にたいする戒めであります。私は若いときに学ばなかったので、年ごろになってもろくな仕事ができませんでした。年ごろになっても学ばなかったもので、いまこのように老いぼれていきます。しかし、まだこれからでも及ぶかぎり学びつづけたいと望みます。

もう一つの額は、美術史家・歌人・書家として名を残された秋艸道人、会津八一博士の「学規」です。これは先生が気に入った弟子にたいして一枚一枚書き与えたものだと言え聞いております。愛読者ではあっても生前お目にかかる機会を得なかった私のところに、なぜ「学規」の一枚があるのかについての事情はここでは説明を省略しますが、次の四カ条が記されています。

- 1, ふかくこの生を愛すへし
- 1, かへりみて己を知るへし
- 1, 学芸を以て性を養ふへし
- 1, 日々新面目あるへし

秋艸道人

とりわけ第3項目の「学芸を以て性を養ふへし」を私は座右の銘としたいと思います。

もう一つ私の胸に刻まれていることばは、いつか新聞で読んでウロおぼえて、やはり佐藤一斎のことばであったように思いますが、たしかめることを怠って

います。次のような意味であったと記憶します。

「一灯を掲げて暗夜を行く。ただ一灯を頼め。暗夜を恐るることなかれ」

押し流されないようにふんばって、主体性をもって生きていきたいと念じます。『資本論』の序文にマルクスが書きつけたダンテのことばを思い出します。

「汝の道を歩め。ひとびとをして言うにまかせよ」

ここまで来て、木下順二さんが書いて送って下さった色紙を表装してかけてあることを思い出しました。

「人は未来を急ぎ過ぎる。あまりに多くの未清算の過去を残したまま」というのです。

話しながらだんだん恥ずかしくなってきました。自分で自分を丸裸にして、ストリップショーを演じてしまったような気がしますのでこれでやめます。残る問題は、経済学をやったことが私にとってよかったかどうか、もし他のことをやったらあるいは多少成功したかも知れない、ということですが、今となっては手遅れです。

立命館大学にお世話になってアッという間に13年たちました。周囲の皆さんにはずいぶん御迷惑であったろうと恐縮しますが、私にとってはたいへん心地のいいところでした。しかし、ちょうど潮時という気がします。同僚の教員の皆さん、職員の皆さん、そして学生諸君、さらにわざわざおいで下さった市民の皆さんに感謝して、お別れのご挨拶を申し上げます。どうも長々とありがとうございました。